

『法華經直談鈔』における「寿量品」解釈の検討

藤 井 教 公

一 はじめに

日本中世末、天台僧栄心（?～1546）によつてまとめられた『法華經直談鈔』は、直談という形式を取る談義本の中の代表的なものとされている。筆者は先に後来の『直談因縁集』と比較しながら本書の性格について検討し、また尊舜『法華經鷲林拾葉鈔』と比較対照しながら本書の「提婆品」の解釈について検討した。⁽¹⁾ 本稿ではそれらを承けて『法華經鷲林拾葉鈔』との対比において『法華經直談鈔』の「寿量品」の解釈について検討しようとするものである。本書において、仏寿無量ということが仏身論との関わりで、どのように解釈されているか、また、直談という形式を取る解釈が、従来の注疏を中心とする解釈とどのような差異を見せているのか、という問題点について明らかにしたい。

二 『法華經直談鈔』における「寿量品」の解釈

『法華經直談鈔』の構成は簡素化された經典注釈書のスタイルを踏襲して、来意、釈名、入文解釈の三段になっており、これは他の直談物も同様である。本書では「寿量品」を解釈するに当たって、品の来意、品名「如来寿量」の解釈、そして一々文々の解釈という順序で、釈名（品名の解釈）以下を一、如来之事、二、連持恵命之事、三、隨自意隨他事、等々の如く計三十一のトピックを設けて解釈している。このうち、第三項の隨自意隨他事から入文解釈となる。

①「如来」の解釈

さて、品名「如来寿量」を解釈する釈名段を見てみよう。項目でいえば、上記の一、如来之事と二、連持恵命之事に相当する部分である。便宜上、尊舜『法華經鷲林拾葉鈔』と対照して掲げる（傍線は両者のパラレルの部分を示す）。まず、「如来」と「寿量」とに分けて解釈するうちの「如来」について、

以下のようにある。

『法華經直談鈔』

先に如来とは、如より来たと云う事也。是れ即ち真如の妙理より来たつて正覚を唱え、迷いの衆生を利益したまうが故に如来と云う也。去れば、此の如来と云うは、一切の諸仏の惣名也。『疏』に云く、「如来とは、十方三世の諸仏、二仏、三仏、本仏、迹仏の通号也」矣と。

二仏とは二如来也。是れ即ち真如の二身也。是れ成実論の「乗如実道来成正覚」の文を引いて之を釈する也。三仏とは、三如来也。即ち法報応の三身也。

先に法身の如来の相をば、『疏』に云く、「法如如境は因に非ず、果に非ず。有仏、無仏、性相常然也。一切処に遍じて異なり有ること無きを如と為す。動ぜずして而も至るを来と為す」と矣。此の真如が法界に遍じて諸

『法華經鷲林拾葉鈔』

一、釈名事。『疏』に云く、「品を釈せば、如来とは、十方三世の諸仏の二仏、三仏、本仏、迹仏の通号也。寿量とは詮量也。十方三世の諸仏の二仏、三仏、本仏、迹仏の功德を詮量する也。今、正しく本地の三仏の功德を詮量す。故に如来寿量品と云う」と矣。如とは真如の理也。来とは無縁の慈悲に熏習せられて衆生に応同するを来と云う也。仍りて一切如来の功德を詮量する故に如来寿量品と題する也。

一、此の如来に付て、三身如来不同也。今の釈に二仏とは、二如来也。真如二身を謂う也。是れをば成論の「乗如実道来成正覚」の文を引いて之を釈する也。三仏とは、三如来也。法報応を謂う也。是れをば大論の「如法相解如法相説故名如来」の文を引いて釈する也。『疏』に云く、「如来の義、甚だ多し。且く二三の如来を明かさん。余は例して解すべし。二如は成論に云く、如実の道に乗じて来て正覚を成ずるが故に如来と名づく。乗は是れ法如如智也。実は是れ法如如の境なり。道は是れ因なり。覚は是れ果なり。若し単に

法と顯れたる處を来と云う也。

次に報身如来の相をば、『疏』に云く、「法如如の智は如如真実の道に乗じて来たりて正覚を成じ、智、如の理に称つて理に従うを如と名づけ、智に従つて来と名づく」と矣。万行万善の修因に依りて修顯得體して本覚真如の理に称う。是れを境智冥合と云う也。理智一体の悟り開けたる理の方を如と云い、智の方を来と云う也。

次に応身如来の相をば、『疏』に云く、「如如の境智合を以ての故に能く処々に正覚を示す。水銀、真金に和して能く諸の色像を塗り、功德、発心に和して処々に応現し往きて成道して妙法輪を転ずるを即ち応身如来とす」と矣。境智冥合の内証より無縁の慈悲に催されて隨縁の利益を施すを妙法輪を転ずと云う也。境智

乗を論ぜば、如如は知る所無し。単に実を明かさば、如如は能く知ること無く、境智和合して則ち因果有り」と矣。一に法身とは、『疏』に云く、「法如如境は因に非ず、果に非ず。有仏、無仏、性相常然也。一切処に遍じて異なり有ること無きを如と為す。動ぜずして而も至るを来と為す。此れを指して法身如来と為す」と矣。如とは真如也。此の真如の理、法界に周遍して個々物々に顯れ、出でたる處を来と云う也。

二に報身如来とは、『疏』に云く、「法如如の智、如如真実の道に乗じて来つて妙覚を成ずる智、如の理に称うを理に従て如と名づけ、智に従て来と名づくる也」と矣。万行万善の修因に依りて修顯得體して本を顯わし、本覚真如の理に称う。是れを境智冥合と云う也。理智一体の悟り開けたる理の方を如と云い、智の方を来と云う也。

三に応身如来とは、『疏』に云く、「如如の境智合を以ての故に能く処々に正覚を示す。水銀、真金に和して能く諸の色像を塗り、功德、発心に和して処々に応現し往きて八相成道して妙法輪を転ずるを即ち応身如来とす。故に論に云く、法相の如く説くが故に如来と名

『法華經直談鈔』における「寿量品」解釈の検討（藤井）

一四

冥合の内証を如と云う也。此の内証より四八の妙相、紫金の妙体と顕わるを来と云う也。仍りて如来とは、一切諸仏の通号也。去れば今此の品の如来とは、先は釈尊の御事と意得すべき也。⁽²⁾

づくる也」と矣。境智冥合の内証より無縁の慈悲に催されて隨縁利益を施し、妙法輪を転ずるを応身如来と云う也。境智冥合の内証は如也。此の内証より四八の妙相、紫金の妙色を顕わすを来と云う也。⁽³⁾

（原文の漢字カナ交じり文を漢字平仮名に改め、正字を略字に置き換え、句読点を付した。また、部分漢文は書き下した。以下同じ）

上掲の解釈を検討してみると、まず如来について、これを「如」と「来」との二語に分けて解釈するが、これは梵語タターガタの通俗語源解釈に基づく中国仏教由来の伝統的解釈である。次に「『疏』に云く」として再々引用しているのは『法華文句』の文である。最初の『疏』の引用中で、『疏』が二仏、三仏というのを敷衍解釈する形で、二仏を真・応の二身、三仏を法報応の三身として仏身論の解釈を示し、法身から順に報身、応身と、その相を述べるのであるが、その解釈をすべて『疏』、すなわち『法華文句』に負っている。今、その『法華文句』の該当部分を傍線を引いて示せば、次のようである。

如来者。十方三世諸仏二仏三仏本仏跡仏之通号也。寿量者。詮量也。詮量十方三世二仏三仏本仏跡仏之功德也。今正詮量本地三仏功德。故言如来寿量品。如来義甚多。且明二三如来。余例可解。

二如来者。成論云。乘如実道来成正覚故名如来。乘是法如如智。实是法如如境。道是因覚是果。若単論乗者。如如無所知。単明実者。如如無能知。境智和合則有因果。照境未窮名因。尽源為果。道覚義成。即是乘如実道来成正覚。此真身如来也。以如実智。乘如実道。来生三有示成正覚者。即応身如来也。三如来者。大論云。如法相解如法相説故名如来。如者法如如境。非因果。有仏無仏性相常然。遍一切処而無有異為如。不動而至為来。指此為法身如来也。法如如智。乗於如如真実之道来成妙覚。智称如理。従理名如從智名来。即報身如来。故論云。如法相解故名如来也。以如如境智合故。即能処処示成正覚。水銀和真金。能塗諸色像。功德和法身。処処現往。八相成道転妙法輪。即応身如来。

（『大正蔵』卷三十四、p.127c-128a）

一見して知られるように、『法華經直談鈔』の解釈部分は全面的に『法華文句』に依拠していることが知られるであろう。周知の如く中国天台では智顗以来、世親の『法華論』に拠って仏身論では法報応の三身説を用い、その三身の即一をいうのであるが、本書では中国天台の解釈を依用し、それに「真如の妙理より来たつて正覚を唱え」とか、「万行万善の修因に依りて修顯得休して本覚真如の理に称う。是れを境智冥合と云う也」とあるように、隨縁真如あるいは天台本覚法門的解釈を加えていることが知られる。『法華經直談鈔』が注釈書の解釈に依拠せずに直ちに経旨に至るといっても、これまで法華思想解釈の根幹部分が中国天台によって構築されてきた以上、そこから全面的に離れることができないのは自明

の理である。

ところで、以上の『法華經直談鈔』の解釈は、著者栄心の独自の解釈ではなく、時代的に先行する同じ直談物の尊舜『法華經鷲林拾葉鈔』に多くを依存している。両者を対比してみると、『法華經直談鈔』がこの段についてはほとんど『法華經鷲林拾葉鈔』に依拠しているのが分かる。両者の解釈を比べてみると興味深いことが知られる。それは『疏』の引用の仕方の相違である。『法華經鷲林拾葉鈔』における引用の仕方は、忠実に文章を引いており、省略もない。ところが『法華經直談鈔』は引用文の語句を略したり、改変したりしているところが見られるほか、『法華經鷲林拾葉鈔』よりもより詳しく引いている箇所は一つもない。この段の叙述が『法華經鷲林拾葉鈔』に多くを負っているところからして、『法華經直談鈔』は『法華經鷲林拾葉鈔』を下敷きにして、不必要な部分を削除し、残り部分をほとんどそのまま取り込んで成ったものであるということがうかがわれる。『法華文句』の引用もすべて孫引きではないかと疑われる。

②「寿量」の解釈

次には「寿量」についての解釈を見よう。長文ではあるが、この部分の解釈を出すと次のようである。ここも『法華經鷲林拾葉鈔』と対照させて示そう。

『法華經直談鈔』における「寿量品」解釈の検討（藤井）

『法華經直談鈔』

次に寿量とは、釈尊は過去遠々の当初よりの如来なれば、その寿命無量也と云う事を説く也。故に如来寿量品と題する也。之に付て若し爾らば、寿無量品と題すべし。何ぞ唯だ寿量と題するやと云うに、今此の本門の意は、始終を論ずる処の有量齊限法を即ち無始無終にして本来常住功德と顯す也。故に寿量と云うが即ち寿無量の義と心得うべき也。

夫れを取て如来の寿量に付て、諸人師の異解不同也。叡法師並びに河西道朗は仏寿常住と云う也。道場寺の觀法師、光宅寺惠雲（ママ）法師は共に仏寿無常と云う也。

サテ天台は此等の諸師の異解を常無常両辺有るべしと釈したまへり。『疏』に云く、「鵲蚌相い扼む。我、其の弊に乘る」と云へり。諸師互いに諍う処は鵲蚌相い扼むが如し。天台は両義共に之を破し、和融の義を存ふは其の弊に乘るが如し。去れば常無常に付いて、四句を釈したまへり。『疏』に云く、「応に四解を具すべし。謂く、実に有量なるを而も無量と云うは弥陀是れ也。実には無量

『法華經鷲林拾葉鈔』

義に云く、寿量品とは、有量際限の義には非ず。功德の詮量也。万法自尔の上に理智慈悲の功德、本来常住なるを説き顯すを以て寿量とは云う也。

又寿命に付て連持恵命の二之有り。連持とは、息風連続して命を持つ。是れ常の人の寿命也。サレハ一息留れば命懸て絶る也。恵命とは智慧也。諸教中には智慧を以生滅無常の法と云う也。今、本門の意は智慧を以て常住不滅の法を顯す。故に諸教の超絶也。仍て連持の寿命に約する時は有量と雖も有限也。恵命に約する時は常住也。今此の品題は、三身の寿命に亘ると雖も別して云う時は報身の寿命を詮量する也。仍て恵命に約する時は常無常の二義之有るが故に、寿量品と題する也。又仏法の中には智慧を以て命とするを正意と為すを得意すべき也。

『法華經直談鈔』における「寿量品」解釈の検討（藤井）

一六

なるも而も有量と云うは此の品及び金光明の是れ也。実に無量なるを有量と言うは涅槃に唯仏与仏其の寿無量と云うが是れ也。実に有量なるも而も有量と言うは八十唱滅の如き是れ也」と矣。

又、寿命に付て連持恵命の二つ之有り。連持の寿命とは、出入の息風也。人は息が命也。去れば息の通う程は存命する也。サテ一息止むれば命も頓て滅也。次に恵命とは、智慧也。智慧は仏法の命也。智慧無ければ仏法は滅也。而るに余經の意は、智慧は生滅無常の者と云う也。今此の本門の意は、智慧を以て常住不滅の法也と。顯事諸經に超過する故也。仍て連持の寿命に約する時は、無常にして斉限有ると雖も、恵命に約する時は常住不滅にして無量也。所詮寿量とは有量斉限の義に非ず。功德の詮量也。

『疏』に云く、「寿量とは詮量也。十方三世の諸仏の二仏、三仏、本仏、迹仏の功德を詮量する也。今、正しく本地の三仏の功德を詮量す。故に如来寿量品と云う」と矣。万法自然なる上に而も理智慈悲の功德、本来

一、寿量に付て、他師今家の得様不同也。他師に取ても觀法師並びに河西道朗は仏寿常住の義を執す。常（ママ）場寺の觀法師、光宅寺惠雲（ママ）法師は共に仏寿無常の義を執する也。天台は諸師の異解を和して常無常の両辺有ると釈したまふ也。（以下三行半中略）

『疏』に云く、「鵲蚌相抱む。我、其の弊に乘る」と矣。諸師相諍うは鵲蚌相抱むが如し。天台は共に之を破し、和会の義を設けたまふは其の弊に乘る心也。

『疏』に云く、「応に四解を具すべし。謂く、実に有量なるを而も無量と云う。弥陀是れ也。実に無量にして而も量と言うは、此の品の如く、及び金光明是れ也。実に無量なるを而も無量と言うは涅槃に唯仏与仏其の寿無量と云うが是れ也。実に有量にして而も量と言うは八十唱滅の如き是れ也」と矣。此の四句の

常住なる相を説き顯すを寿量とは云う也。⁽⁴⁾ 釈にて常無常相違無しと得心すべき也。⁽⁵⁾

ここでは品名を寿無量としないのはなぜかということ、『法華文句』を引いて説明し、その後、諸師の寿量について異解のあることを出し、天台の四解を出している。さらにその後、連持と恵命によって寿命の常・無常を解釈している。この解釈も『法華文句』を踏まえての解釈で、日本天台における独自の解釈というものではない。

この解釈を先と同様に『法華經鷲林拾葉鈔』と比べてみよう。上掲の対照表から『法華經直談鈔』が字句と表現を少し変えただけで、そのほとんどを取り込んでいることが知られよう。しかし、『法華經直談鈔』に独自の解釈が見られないというのではない。紙幅の制限上、詳述することができないが、「如来秘密神通之力」の解釈には『法華文句』の解釈に⁽⁶⁾ 抛りながらも、法体法爾の三身として法身を法界一如の理、報身を法界依正の上の本有の智慧、応身を法界依正の上の本有の慈悲とし、非情草木の振舞もその智慧と慈悲に適うものとしている。これはその根底に草木成仏思想が認められるが、この記述は本書独自のものである。

三 小結

これまで『法華經直談鈔』の寿量品について、その三身説、

寿量に関する説について検討してきたが、中国天台で説かれていること以上の教学思想上の展開の跡は見る事ができなかった。しかし日本天台的特徴としては天台本覚法門的な表現が見られたが、これは寿量品の箇所だけでなく、本書全体に見られるものである。本書と先行の『法華経鷲林拾葉鈔』と比較してみると、本書が『法華経鷲林拾葉鈔』をいわば種本にして、字句表現を変え、パラグラフの位置を変え、必要な所を削除して、ほとんどそのまま取り込み、自己の新たな解釈を挿入して成立したものであることが分かる。

- 1 藤井教公「室町時代における『法華経』の唱導」(『印度哲学仏教学』第20号、pp.1-13、2005年10月)、同「『法華経直談鈔』の内容検討―『法華経鷲林拾葉鈔』との対比から―」(望月海淑編『法華経と大乘經典の研究』pp.295-313、平成2006年6月、山喜房)。
- 2 栄心著・池山一切圓解題『法華経直談鈔』三、pp.103-104 (臨川書店、1998、再版)。
- 3 永井義憲解題『法華経鷲林拾葉鈔』第三冊、p.490-493 (臨川書店、1991)。
- 4 栄心著・池山一切圓解題『法華経直談鈔』三、pp.106-107。
- 5 永井義憲解題『法華経鷲林拾葉鈔』第三冊、p.494-496。
- 6 「祕密者。一身即三身名為密。三身即一身名為密。又昔所不説名為密。唯仏自知名為密。神通之力者。三身之用也。」(大正藏卷三十四、p.129c)

(本稿は文部科学省科学研究費補助金基盤研究Bによる研究成果の一部である)

〈キーワード〉『法華経直談鈔』、『法華経鷲林拾葉鈔』、『法華文句』、栄心、尊舜、直談

(北海道大学大学院文学研究科教授)